

の取り組みであった。さらに名瀬市のグスク分布調査では多くのグスクが確認され、新たな視点を提供している。

### 3 中世山城跡出土の近世遺物

中世山城跡に最後の手が入られるのは、関が原の戦いに破れ、徳川幕府の南下に備えたものであるという。もちろん841か所がすべてではなく、交通の要衝で、地域の本城として重要視され、戦国期に使われたものが中心であろう。串木野城は16世紀末以降に最終的に造成され、そのまま残された可能性がある<sup>21</sup>。また薩摩藩が兵農分離を進め家臣団を再編成する際に、当初は中世山城跡の大手口付近に有力家臣群が配置されたことが、出水市の亀ヶ城跡にみられ<sup>22</sup>、国分市の国分新城跡の「国分郡屋形跡」とある古地図には重臣たちが国分新城の城内に住んでいた時期がある<sup>23</sup>。藩生籠の成立期においても、藩生籠の城山の麓の三の丸の迫地区において居住し、今日の役場付近の麓に移ったのは享保の年代と思われることから<sup>24</sup>、初期の外城形成期にあっては、戦略上の要地の城についての防備は確実に受け継がれて行くことが示されている。17世紀の前半の遺物は出土する可能性があるということである。

第1表は発掘調査された中世山城跡で出土した近世遺物についてまとめたものである。発掘調査の規模については、部分的なものが大部分である。発掘調査の規模や調査地点・曲輪などによって一様に遺物が出土するものではないが、寛永通宝・煙管・薩摩焼・肥前陶器、清洲染付などが出土している。籠を形成した山城跡で近世遺物が出土していることがわかる。第2図1～4は始良町建昌城跡出土の煙管で、18世紀代のものである。煙管については、三垣恵一が出土地名表を作成し考察している<sup>25</sup>が、煙草を吸うようになったのは16世紀末頃からであることが確実で、県内では17世紀後半からのものが出土している。寛永通宝(5～8)は初鑄年が寛永13年(1636)とされており、1636～1659年までの古寛永銭とそれ以降の新寛永銭がある<sup>26</sup>。背に「文」字のはいる文銭や、もっとも多量に鑄造された18世紀中頃のもの新寛永銭である。古寛永銭と新寛永銭のどちらも出土している。第2図は宮之城町松尾城跡出土のものであるが、5・6・7が古寛永銭で、8が新寛永銭である。薩摩焼は黒物の甕やすり鉢等を中心とし、18世紀台がもっとも多い。薩摩焼の摺鉢については、渡辺芳郎により、編年観がまとめられている<sup>27</sup>。第3図13・14は松尾城跡出土の徳利と貝目をもつ甕である。この甕は串木野城跡でも出土している。摺鉢は渡辺の仮称3型式(15～18)と4型式(19)で、松尾城(16)と加世田市別府城跡(15)、鹿児島市谷山城(17～19)のものである。仮称3型式は18世紀代に、仮称4型式は19世紀代とされる。肥前陶器は9～11は別府城跡出土のもので、12が東郷町鶴ヶ岡城跡出土のものである。9は波佐見系染付で、内側につる草文、見込に蛇の目状の輪はざが見られ、その内に五弁花文がある。10は外側に

仙芝祝寿文、高台内側に大明年製が描かれている。11は蛇の目高台の内側に「過福」があり、口縁部内側に草文を描く。12は高台内側に「福」字文がある。これらは18世紀代のものである。このほかに火舎や石臼が出土することもあり、遺物からは近世の時期に城跡内にいて、簡便な生活がおくられたことを窺わせるものである。煙管・寛永通宝については、畑仕事や山仕事での一服や紛失品、近世墓の副葬品の可能性も捨て切れないが、谷山城・串木野城・知覧城・別府城等では、併せて陶磁器等が出土してくることから、短期間にしろ居続けたことがわかる。

(出土遺物の資料の引用は各中世山城の報告書からであり、註は省略)

### 4 史料から見た近世の中世山城

中世の山城のうち、近世薩摩藩の外城制度に組み込まれたものも多い。外城制度とは本城を中心として、領内各地に支城を配置し防衛拠点とし、且つそれを中心とする内政上の区画を設けたものである。籠の武士が軍団を形成してそのまま地頭の指揮で動員される。藩政初期には軍事的機能に重点が置かれ、その後は政治・交通の便により、新しい外城や籠の形成もおこなわれた。その城警施設は一國一城令とともに全廃したが、城跡はいずれも城山あるいはお城と呼ばれ、猶ほ有事の際は利用されるべきものであった<sup>28</sup>。鹿児島県の中世山城跡については、藩政期にも関心が寄せられていて、関連する資料が三木靖によりまとめられている<sup>29</sup>。元和元年(1615)「一國一城令」の後に、寛永十年(1633)幕府巡見使小出吉親らの「一國一城令」に違法の疑いと質問に家老川上久因が「太閤下向の際に領国が減じ、そのため武士がもどってきて人が増え、米が乏しく、古小城を壊すと田畑を埋め人民が飢える」との申し開きをした。窮乏な経済事情が理解され、外城制度が黙認されたとある<sup>30</sup>。

藩政期の関心の高さは、古城等の旧跡としての史料にみられ、文政7年(1824)の「薩藩名勝誌」<sup>31</sup>に古城として61ヶ城を数え、寛政元年(1789)の幕府上使への答申書には「國中古城之事」26ヶ城が上げてあり、「當分ハ山野之林二候」としている<sup>32</sup>。天保14年(1843)編集の「三國名勝図会」<sup>33</sup>のなかで、各郷の城跡をとりあげ、本県のみで292ヶ城が掲載されている。個別の城跡について元禄12年(1699)「古田松尾之城」の絵図<sup>34</sup>、元禄12年(1699)川辺町平山城についての「川邊大境井内繩引帳」<sup>35</sup>や、同じく元禄12年の「國分新城綱引帳」<sup>36</sup>の写しが残っている。寛政四年(1792)「名所旧跡御札方取調帳留」には知覧城の城郭の範囲面積、本丸の高さ、曲輪の呼称や配置が記される<sup>37</sup>。また天保5年(1834)3月に写された「藩生龍ヶ城跡」の絵図などが残されている<sup>38</sup>。加えて、『藩生土族共有社其源』のなかに「御地頭御問答写」があり<sup>39</sup>、慶応元年正月(1864)に答申した文書を慶応二年寅五月に写されたものに、防戦時